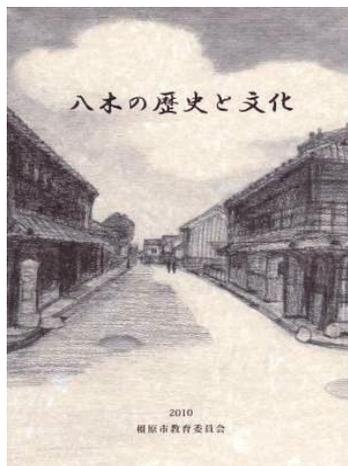


八木を知る本の紹介

八木の歴史と文化



編集・発行は奈良県橿原市教育委員会 2010
巻頭、吉本教育長は、

『「橿原」ここは悠久の時代より、歴史と文化に育まれた土地、先人から受け継いだ多くの文化財が遺されている。』

また、

『“札の辻”に立ち、旧旅籠の姿を眺め、歴史に思いを馳せるとき、より深くこの八木町の歴史を知る一助として本書をご活用いただければ幸いです。』

と綴られています。

目次

- I.はじめに
- II.八木町の歴史 平井良朋
- III.八木町・(旧旅籠)平田家について 林清三郎
- IV.八木の愛宕祭りと立山 鹿谷勲
- V.八木の文化財

伝記 谷三山

谷三山百年祭記念事業推進会 (1966年)

堀井義治

幕末の混乱期に尊皇攘夷を説き、吉田松陰も教えを請うた儒者である谷三山(たにさんざん)の伝記。

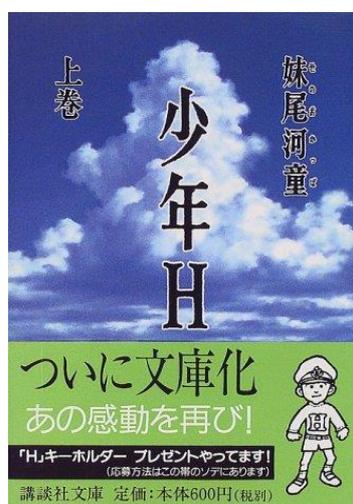
10代で聴力等を失うも私塾「興讓館」を開き多くの門人を指導したが、明治維新を目前に世を去る。今も生家が八木にある。



『三山先生遺稿』

奈良県高市郡教育会編
谷三山の遺稿を集めた本。

少年 H(上下)



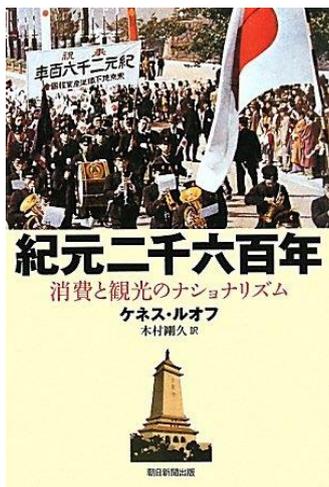
講談社文庫 (1999年)

妹尾 河童

胸に「H.SENO」の文字を編み込んだセーター。外国人の多い神戸の街でも、昭和十二年頃にそんなセーターを着ている人はいなかった…。洋服屋の父親とクリスチャンの母親に育てられた、好奇心と正義感が人一倍旺盛な「少年 H」こと妹尾肇が巻き起こす、愛と笑いと勇気の物語。毎日出版文化賞特別賞受賞作。(「BOOK」データベースよ

り)
2012年畝傍高校で映画「少年 H」のロケがあり、
2013年公開。

紀元二千六百年消費と観光のナショナルリズム



朝日新聞出版 2010 ケネス・ルオフ 木村剛久著
神武天皇による建国から二千六百年とされた
1940年、大日本帝国では万世一系をたたえるさま
ざまな記念行事がくり広げられた。帝国臣民は定
時に宮城を遙拝し、皇国史を学び、愛国歌・作文
の募集に応じ、聖地を訪れ、催事を見に出かけた。
神社を拡張整備する勤労奉仕もいとわなかった。
こうした大衆参加を促したのは国だけではない。
新聞社や出版社、百貨店、鉄道会社などの民間企
業も祝典をビジネスチャンスととらえていた。帝
国全土にわたる消費と観光を支えたのは近代ナ
ショナルリズムである。（「BOOK」データベースよ
り）

近代奈良の建築家 岩崎平太郎の仕事 -武田五一・亀岡末吉とともに

川島智生著

岩崎平太郎（1893～1984）は明治末期から昭和期
にかけて関西、主に奈良県を中心に活躍した建築
家で、八木にある畝傍高校の設計にも関わった。
その他、奈良女子大学の佐保会館など、奈良県下

で登録文化財の指定を受ける近代建築のうち2件
が岩崎氏の設計による建築であり、奈良県で最初
に建築事務所を開設するなど奈良にゆかりの深い
平太郎の建築業績を、現存する建築と岩崎家に伝
存する平太郎筆の図面や資料を通じて紹介、合わ
せて平太郎の師匠である建築家の武田五一（1872
～1938）や亀岡末吉（1865～1922）との交流・関
係についても検証する本。

【この本で紹介する奈良県下の主な建築】

近鉄吉野駅・吉野神宮駅の駅舎（吉野町）・白雲荘
（吉野町）・森野旧薬園知止荘（宇陀市）・奈良県知
事公舎（奈良市）・畝傍高等学校の校舎（橿原市）・
奈良女子大学佐保会館（奈良市、登録文化財）・天
理大学一号棟（天理市）・天理教天御津分教会（旧
天理教奈良教務支庁、奈良市）・天理教敷島大教会
（桜井市）・南都銀行旧手貝支店（奈良市、登録文
化財）

昭和の奈良大和路



光村推古書院 2011

入江泰吉 入江泰吉記念奈良市写真美術館

戦災で故郷である奈良に戻った入江泰吉
（1905～1992）は、奈良大和路の風物に救われた
と語っていた。約半世紀にわたって撮り続けてき
た入江だが、その原点は、戦後すぐに見た、昔と変
わらない農村風景であり、街を行き交う人や明る
い子どもたちの表情だった。写真集に収録した二
百点を越える写真からは、入江の温かいまなざし
が感じられ、奈良大和路の飾らない風景が広がっ
ている。これは入江の心の原風景であり、貴重な
記録写真でもある。（「BOOK」データベースより）

奈良をはじめ三輪や飛鳥の貴重な写真がたくさん掲載されている。白黒だが、生まれる前のことなのにそののにおいまで感じるのは奈良人の DNA が覚えているのだろうか。

八木近辺ではいかに当時、大和三山が貴重な風景だったことがわかる。どこからも視認できたこと、三山周辺の建物が山並みに似合う建物・景観だったからだろうか。点景に入る人物もいきいきしている。

きっと、どこかで見た風景に出会える、コンパクトで美しい本。

糸ぐるまは回る



星湖舎 2005 細川俊子著

表紙は八木札の辻の江戸時代の旧旅籠（画：川口美乃里）。

八木の町に生まれた筆者の、大正 8 年から昭和 8 年の 16 年間のこの町での生活を綴った随筆である。

現在、この町を離れてしまった筆者が、幼かった頃を振り返り、孫に語り聞かせるように、町での暮らし、身近な人々、学校のこと、近くの遊び場、祭り等々、幼ない目で見た生活が生き生きとした筆使いで描かれている。

春夏秋冬に分類された 44 の随筆は、私のようにこの町に生まれ育ったものにとっては、文中に出てくる家々や祭りなど現在もそのまま残っているだけに、懐かしく幼い日のことが蘇ってくる。

筆者の記録したこの時期は、近鉄電車大阪行が開通しこの町が経済的に発展した時期でもあった。その後、第二次大戦の重苦しい気分が町を覆い始める前の明るさと豊かさが伝わってきて、町の生きた歴史を知る良い資料でもある。

この町を知る上でぜひ、一読頂きたい、本である。

(T.Y.)

目次例：

大神楽、神武さんの日、飛鳥川の洪水、山守の松ちゃん、「兵隊泊まり」の夜

大和から もうひとつ つたえたいこと。



やまとびと編集部 2008 文・写真 西田敦

奈良は第二次大戦の戦災から免れたと言われているが、多くの戦争遺跡が残されている。東京や大阪のように爆撃に会ったという被害は少なかったとはいえ、機銃掃射による人の命が奪われたことや、迎撃の施設のあったことはあまり知られていない。

筆者はその痕跡を丹念に歩き、写真におさめている。中でも、座敷の鴨居に銃弾が埋め込まれている写真などは、逆に爆撃に会って消滅した大都会では見ることのできない貴重な写真であり、戦争の恐ろしさをまざまざと感じさせる。

経歴によると、筆者は戦争を知らない世代であるようだが、こういった若い人がこのような本を上梓したことはうれしいことである。写真の美しさは見応えがある。

祖父母が孫たちと、親たちが子どもたちと、近い将来「先人」と呼ばれるようになる私たちが、今、一つの物事を考える素材・機会を提起することができます。（T.Y.）

紹介例：畷傍駅貴賓室、耳成山の壕、海軍経理学校（畷傍高校）

古代への風景



東方出版 2007 千田稔著

この本は大和の原地域とされる「巻向山」から始まる。

筆者曰く、「風景を歩くことは歴史のイメージを発見することかもしれない」とあるように、やがて物語は時代を降り、斑鳩の里を経て、「神の領域」飛鳥に移り、やがてなじみある藤原京の地に風景をターンさせていく。

藤原京を現代の地図に重ね合わせると、南北の「西二坊大路」は下ツ道で、東西の「三条大路」は横大路（伊勢街道）。その古道の交差点が八木札の辻なのは皆様もご存知の通り。

この本のおかげで、奈良盆地を大空から鳥になって一周する気分が味わえ、またそうした風景の一部に八木の町があることに小さな感動を覚えずにはおれません。八木を、大和を知る書としておすすめ。（F.I.）

帯のことは：歴史地理学への新たな誘い。

大和に佇み、目の前に広がる空間を歴史の現場として体感する。

天皇陵古墳を歩く



朝日選書 2018 今尾文昭 著

古墳時代研究の第一人者で、陵墓公開を求める関連 16 学会へ許可された第 1 回の立ち入り観察から参加してきた著者が、そのときの模様や、古墳周辺の踏査で見えてきたことを詳しく紹介する。近世・近代の治定の過程、最新の研究成果を踏まえて、天皇陵古墳一つ一つの年代観、治定の正否を示す。

歴史の道を行く 橿原市内に息づく古道を訪ねて



橿原市企画整備部企画政策課発行 2009

和田萃著

橿原市内を私たちが日常的に歩いている道が、1000 年以上も前に作られた、古代の人たちが往来していた道であることに気付くと不思議な気持ちになる。

筆者は、長年に亘る古道の研究成果を、分かりやすく解説している。この本を持って町を散策すると先生の解説を聞きながら歩くようで、町を見る目が違ってくるだろう。

街角の風景や道標などはすべて、写真ではなく奈良芸術短期大学の学生の巧みなスケッチで飾られているのも良い。惜しむらくは、新書判の書物であれば、ポケットに入りやすかったと残念である。(T.Y.)

付録 KODO map 橿原市の古道散策

奈良県の太神宮常夜燈



荒井留五郎著 2010

130620 著者の許可を得て掲載いたしました。その折に、橿原市久米寺境内にある太神宮常夜燈が新たに確認されたことや、発行当時 734 基が掲載されましたが、その後 747 基まで新たに確認できたことをお聞きしました。また掲載内容の修正も教わりました (P178 の No.602 大和郡山市八条町の太神宮について【誤】天保一辛卯十一月吉日【正】天保六年六月吉日 当村中)。

調査当時は橿原市の友人宅に逗留しました、ともおっしゃっていました。今後も調査が進むと思いますが、お体に気をつけて、またぜひ八木にもおいで下さることをお待ちしております。

街道をゆく

司馬の代表作「街道をゆく 1」は全 43 巻におよぶ。1971 年はじめから週刊朝日に連載された短編の随筆を集めたものである。滋賀から始まる随筆の旅は、大和石上神社へと向かい、横大路を竹内峠に向かう。しかし作者は、この横大路を古道であるが名前は知らないし、札の辻を素通りしている。1971 年の八木札の辻の置かれていた状況が分かる。

同じく七巻には八木駅から今井を經由して高取城に向かう随筆がある。この中でも、下つ道を分かんずくに、古道であるが名前は知らないから、「壺坂みち」と言っておこうと言っていて、こちら札の辻は立ち寄っていない。

しかしこの『街道をゆく』を取り上げたのは、この下つ道、横大路につながる多くの歴史を、日本の歴史の重層として捉えていることにある。この中に登場する多くの人物は、まぎれもなく、札の辻を歩いていったからである。司馬遼太郎をふくめて。(T.Y.)

奈良の街道筋



草思社 1989

著者：青山 茂 絵：沢田 重隆

1988 年から 94 年に掛けて同じ画家の挿絵で、京都は寿岳章子、奈良は青山茂で発行された随筆である。奈良は上下巻を北部と南部に分けて街道を訪ねている。司馬遼太郎の『街道をゆく』から 20 年近く経過し、横大路、下つ道もはっきり記載さ

れているが、札の辻は古い民家が残されていると言った記述にとどまっているが、記録されているのが分かる。

このシリーズは、なんとと言っても挿絵のすばらしさである。白黒の単色であるが、写真以上に建物や風景、植物や雨粒までもわかる挿絵である。この絵を見るだけで、奈良のあらゆる街道を歩いた気分を味わえる。京都編共々おすすめである。

(T.Y.)

大和茶室探訪Ⅱ

奈良県建築士会 2004



EUNARASIA2017vol.7

奈良県立大学

「幕末大和の大学者、谷三山の足跡を追う。」(谷山正道)

2016NARA-EURASIA Institute's Report2

公立大学法人奈良県立大学ユーラシア研究センター2016

谷三山、師の師たる人。

「谷三山研究会」調査研究レポート

ふるさとの思い出 65

写真集 明治大正昭和 橿原

国書刊行会 1979

目で見る大和路

サンケイ新聞社奈良支局 1987

藤井 辰三 (著)

西国三十三所名所図会

嘉永元年・1848年

暁鐘成 編輯、松川半山、浦川公左 画図



「八木札街」

奈良県の近世社寺

橿原市立図書館にあります。

橿原市史

橿原市立図書館にあります。

「笈の小文」

松尾芭蕉

恵比須神社所蔵文書

橿原市立図書館にあります。

東の平田家文書

東の平田家に所蔵されています。リストの閲覧は橿原市魅力創造部世界遺産・文化資産活用課まで。

重要文化財森村家住宅保存修理工事報告書

橿原市立図書館にあります。

**「八木札の辻」東の平田家（旧旅籠）の保存
および地域活性化にむけた調査研究**

橿原市教育委員会 2008

橿原市立図書館にあります。

奈良県高市郡寺院誌、神社誌

1915

橿原市立図書館にあります。

絵図に見る伊勢参り

旅の文化研究所